海の匂い

芝木好子

芝木好子
自選集

海の匂い

冬樹社

海の匂い

定価　五二〇円

著者との話合いで検印は省略します

初版発行　一九六五年二月七日

著者　芝木好子

発行者　滝泰三

発行所　冬樹社

東京都新宿区四谷四の三〇

電話　東京（三五二）八五八五　代表

振替口座　東京七七五七

印刷所　三恭印刷株式会社

製本所　一重製本株式会社

海の匂い

芝木好子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

海の匂い

定価　五二〇円

著者との話合いで検印は省略します

初版発行　一九六五年二月七日

著者　芝木好子

発行者　滝泰三

発行所　冬樹社

東京都新宿区四谷四の三〇

電話東京（三五二）八五八五代表

振替口座　東京七七五七

印刷所　三恭印刷株式会社

製本所　一重製本株式会社

芝木好子
自選集

海の匂い

冬樹社

目次

家の終り 11
異国の旅 49
二つの蝶 71
本郷菊坂 99
海の匂い 119
下町の空 141
雪女 175
うるわしき五月 205
有明海 241
あとがき 273

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芝木　好子

自選集

海の匂い

家の終り

病人を見舞うために恭子は駅の近くの花屋へ寄ったが、季節のせいか菊の花ばかりあふれるほどであった。黄色の大輪が一際目についた。

虎の門にある近代的な明るい病院の三階の病室は、ホテルの小部屋に似ていた。彼女を出迎えた伯母はひさし髪に結った細面てのひとで、看護のせいかめっきり老けて、顔もからだもちぢまってみえた。恭子は病人を見るのが不安な気がした。奥のベッドに仰臥している伯父の克衛は、心もちこちらへ顔を向けていた。彫の深い、調った顔も、手術のあとだけに削げたように肉がおちて、鼻梁だけが尖ってしまい、皮膚も土気色に沈んでいた。しかし危機を脱したやすらぎのせいか、表情はおだやかで、眼差もやさしかった。

恭子は見舞の花を枕許におきながら、七十歳を越えた老人が病んで、同じような老女の伯母

が看っているさまをしみじみ眺めた。
「手術、たいへんでしたね」
「ああ、駄目かと思ったよ」
「まだ痛みますか」
「ときどき痛む」
この年齢になって胃潰瘍を手術することになった伯父は、人騒がせをきらって、ほんの内輪の者にしか知らせなかった。恭子もあとになって知ったのである。元々控え目なひとで、騒ぎたてて人を驚ろかせるのは性に合わなかった。ことに近頃はそうで、自身の発病にも気兼ねをしていた。老齢の手術についても医師がおどろくほど素直だった。それでも数日間の痛みは、さすがに応えたらしくベッドの近くで人が喋っても痛かったと恭子に話した。枯れたからだは抵抗力が乏しいのであろう。伯父は丈夫な質ではなく、青年期に大患をして以来、よくここまで保ったといわれるほうであった。恭子の父などは元気潑剌として、したい放題のことをしてきた男だが、四十代の終りに亡くなってしまい、他の伯父たちも次々と逝って、残った老人はほとんどいなかった。
この伯父を長い間支えてきたのは、家業の薬品問屋があったからであろうが、二年前に廃業してしまうと急に気落ちしたとみえて、老いこんだ。発病はそのあとにきたのである。この手術をともかく切りぬけたのは、一生働きつづけた人間の芯の強さかもしれなかった。あとは日ましの快復を待てばよかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com